連載　いつきのつれづれ日記 ⑩

書庫の会話っておもしろい

12月×日

京都市内にある某会議場の一室。そこに集められた10人ほどの中に、わたしもいた。みんな、雑談をしながらも期待と不安の入り交じった表情を隠すことができない。と、呼び出しがかかった。「いつきさ～ん、貸し出しです」「は～い。ほな行ってくるわ」「いつきさん、ええなぁ。僕なんて売れ残りですよ」。みんな好き勝手言っている。部屋を出て行くわたしの頭の中には「ドナドナ」のメロディーが流れている。部屋の外には「わたしという本」を借りてくれた人が待っている。さぁこれから30分。この人たちと一緒に、どんなストーリーを紡ぎ出すことになるだろう。

＊　＊　＊

2008年12月、京都国際会館で、日本初のリビングライブラリーがLiving Library Japanと東京大学先端研の共催で開かれました。それに先立つ6月28日、朝日新聞に「生きている図書館」と題する記事が掲載されました。貸し出される「本」のうちのひとつに「性転換者」と書いてあるのを読み、少し驚きながらも、「SRSをしていない（「性転換者」ではない）自分とは関係ないことやなぁ」と感じたことを覚えています。

その直後、どういうわけかリビングライブラリー事務局から連絡があり、昨年、「本」として参加することになりました。リビングライブラリーの創始者のひとりであるRoni Abergelさんがオープニングセッションの講演の中で「これまでに提供された本の中には、例えばtransgenderもいる」と話され、「なるほど、transsexualではなかったんだ」と思いました。ちなみに、通訳の方は「ホモセクシュアル」と訳されていましたが…。

あれから1年、いまやあちこちでリビングライブラリーが開催されています。

今回のリビングライブラリーでは、「高次脳機能障害」「不登校経験者」「アメラジアン※」「全身にやけどを負った人」「セックスワーカー＆ソーシャルワーカー」「ビッグイシュー販売員」等々、たくさんの人が「本」になりました。わたしが与えられたタイトルは「お父さんがだんだんと女になっていく」、つまり「家族」がテーマでした。

わたしやわたしたち家族にとっては、トランスジェンダーという属性を持つわたしが家族の一員であることは、もはや当たり前のことです。しかし、読者のみなさんにとっては、もしかしたら想像もつかないことなのかもしれません。みなさんの質問に答えながら、わたしたち家族の「航海」の軌跡をあらためて振り返らせてもらうことができました。そんな中に、いくつか「名言（迷言？）」があったようです。ある読者の方から「いい言葉をきいたなあ」という感想をもらいました。その「言葉」については、また回をあらためて書いてみようと思います。

ところで、リビングライブラリーは、「本」同士にとっても、とても大きな出会いを与えてくれます。中でも書庫での会話は刺激的です。今回もっとも刺激的だったのは、アメラジアンの青年による「あなたのアイデンティティは？」という問いかけでした。いずれの「本」も、なんらかの障碍や生活上の不具合を抱えておられます。にもかかわらず、この問いかけに対して誰も即答しませんでした。そこに、障碍や不具合のみで生きているわけではない、「本」の人々の生き方を感じさせられました。もちろん、書庫の会話だけで満足出来るものではありません。今年は、何人かの「本」と一緒に、前日からはじまって3日連続、毎晩飲み会を企画するハメになってしまいました。最終日の夜、福岡から来られた「本」が終電間際に「帰りたくない」と言いながら去っていかれたのが、すごく印象的でした。

ところで、「生きていない本」も、実は深夜の図書館で思い思いに交流をしていたりして…。

（土肥いつき　高校教員）

※アメリカ人軍属と日本人（アジア人）女性の間に生まれた人。

イラスト／畠山恭子